第10回

人と自然の共生国際フォーラム

The 10th international Forum on Interrelationship between Nature and Human Beings

第10届 人与自然和谐共处国际论坛 | 제10회 사람과 자연의 공존 국제포럼 | 10º Fórum Internacional de Convivência entre o Ser Humano e a Natureza

報告書 - 概要版 -

2016.10.29(土)
人と自然の共生国際フォーラム
会場 | ウィルあいち 3階 大会議室

2016.10.30(日)
海上の森活動発表会・意見交換会
会場 | あいち海上の森センター

主催／人と自然の共生国際フォーラム実行委員会（愛知県、瀬戸市、愛知県国際交流協会、中日新聞社、名古屋大学、愛知県立大学、大学コンソーシアムせと、NPO法人海上の森の会、NPO法人才の木、あいち自然環境団体・施設連絡協議会）

後援／総務省、環境省、経済産業省、農林水産省、一般財団法人地球産業文化研究所、一般社団法人中部経済連合会、名古屋商工会議所、独立行政法人国際協力機構（JICA）中部国際センター、東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林生態水文学研究所、愛知県森林協会、公益社団法人愛知県緑化推進委員会、愛知県森林組合連合会、愛知県自然観察指導員連絡協議会、森林インストラクター会“愛”

開 催 概 要

第10回 人と自然の共生国際フォーラム

The 10th international Forum on Interrelationship between Nature and Human Beings

1、開催趣旨

このフォーラムは2005年に開催された愛知万博の理念や成果を継承し、人と自然が共生する持続可能な社会づくりを考えるため、平成19年度から開催しているものです。

10回目の最終大会となる今回は、これまでのフォーラムを総括し、「これから」に向けた提言を行うとともに、愛知万博記念の森である”海上の森”における「これから」の具体化、実践について議論し、考えるフォーラムを開催しました。

2、テーマ

◆メインテーマ　**自然と共に歩む明日をつくろう**
Building a Future for Nature and Humanity

◆サブテーマ　**「海上の森」未来へつなぐ里山の絆**
Kaisho Forest “satoyama bond” perspective for the future

3、開催日時・場所

人と自然の共生国際フォーラム
◆平成２８年１０月２９日(土)　13：00 ～ 16：45
ウィルあいち ３階 大会議室（愛知県名古屋市東区上竪杉町１番地）

海上の森活動発表会・意見交換会
◆平成２８年１０月３０日(日)　10：00 ～ 16：00
あいち海上の森センター（愛知県瀬戸市吉野町 304-1）

4、主　催

人と自然の共生国際フォーラム実行委員会
（愛知県、瀬戸市、愛知県国際交流協会、中日新聞社、名古屋大学、愛知県立大学、大学コンソーシアムせと、NPO法人海上の森の会、NPO法人才の木、あいち自然環境団体・施設連絡協議会）

5、後　援

総務省、環境省、経済産業省、農林水産省、一般財団法人地球産業文化研究所、一般社団法人中部経済連合会、名古屋商工会議所、独立行政法人国際協力機構（JICA）中部国際センター、東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林生態水文学研究所、愛知県森林協会、公益社団法人愛知県緑化推進委員会、愛知県森林組合連合会、愛知県自然観察指導員連絡協議会、森林インストラクター会“愛”

10月29日　人と自然の共生国際フォーラム

特　別　講　演

テーマ：『美しき日本を求めて』

講　師

アレックス・カー（Alex Kerr）氏

東洋文化研究者、NPO法人篪庵（ちいおり）トラスト　理事長

1952年米国生まれ。1964年家族と共に初来日。エール大学、英国オックスフォード大学卒業後、1977年より京都府亀岡市に在住し、日本と東アジア文化に関する講演、執筆等に携わる。2004年から2010年京都で町家再生事業を営み、その後NPO法人「チイオリ・トラスト」の理事長として伝統家屋の修築保存活動、景観コンサルタントを日本各地で展開。著書：『美しき日本の残像』（1993年新潮社、新潮学芸賞受賞）、『犬と鬼』（2002年講談社）、『世流に逆らう』（2012年北星社）、『ニッポン景観論』（2014年集英社）など。

講演内容要約（事務局文責）

私は日本に来て今年で52年目です。子どものときに横浜に住んでましたが、70年代の後半からずっと京都の隣の地の亀岡に住んでいます。まだ大学生のときに、徳島県の祖谷という非常に美しい深い山との出会いがありまして、かやぶき屋根の民家を買いました。あれから40何年もたちますけれども、今現在も家を中心にして、日本全国的に古民家再生とかの活動を続けています。

二つのメインテーマで、第1部では木というテーマに絞って話したいと思います。日本は自然を愛する国として世界で知られていると思いますし、木とか林、森に関しては古くから鎮守の森、つまり信仰の対象でもありました。木は、精霊が宿った聖なるもので、特に神社の周りの森はそのままにしておかなければならないという長い伝統があります。

枝ぶりのきれいな森は日本の全国の神社に見ることができます。古い木、大スギにはしめ縄で囲って、これは触るなよ、これは聖なるものだという意味を込めて大事にしてきました。なかなか不思議な美しさです。

神社だけではなく、例えば古墳もあります。これは奈良県にある天理市の近くにある櫛山古墳と崇神天皇陵。堀の中の鍵型のエリアはもう完璧に原始林。1000年近くほとんど人が入ったことがなく、今も宮内庁の管理で入れません。美しく見事に守られています。

さて、日本がずっと森を大事にしてきたかというと、特に明治以来いろいろ変わってきました。明治維新から始まって日本は急速に近代化してきました。第2次大戦が終わった後に経済大国になりますが、この中で文化的な変化が起きたと思います。それは、工業、特に大きな工場でのものづくりが、ある意味で社会の理想として独り歩きしてしまったのです。つまり、ぴしっとしたものをつくることが素晴らしいんだと。私なりの言葉で、工業モードと言っていますが、これがあらゆる面で、今の日本の現代文化に影響してきたと思います。

例えば、古い町、昔の街並みがどんどん壊されていくのも、昔の木や茅葺きや瓦の家は、時代遅れで文明的でないという思いが深く浸透しているからだと思います。ですから家を建て直すときに、ピカピカした金属で、色を赤とか黄とかで作って、古くさい日本から脱皮して、現代人になったと周囲に言いたいのだと思います。

今度それが森になってくると、戦後の日本では建材の供給ができるように、国の政策としてかなり大規模なスギ、ヒノキの植林が始まりました。特にスギは伸びが速く真っすぐ伸びるので、建材として使いやすいスギに力が入ったのです。今、日本に来ている外国人、また日本の若い人たちもスギ山を見て、これが日本の自然だと思っているのですが、日本の従来の自然は広葉樹。これは日本の長い歴史の中に、平安時代の和歌とか芭蕉の俳句とか、屏風絵、墨絵、掛け軸、歌舞伎舞台、あらゆる面で日本の美的観念として育てられてきた原点です。

それが変わって、スギ、ヒノキが植林されました。工業モードの考え方では、雑木は価値がない。建設業とかに使える森林でなければ無用なんです。それにもう一つ、観念的なことですが、スギなどの植林は列を成して並んで、真っすぐ伸びるので行儀がよくて綺麗、という感覚が国民の意識に深くあるかもしれません。そのスギ、ヒノキを大量に植える政策は、戦後すぐには立派な政策に見えたと思いますが、あれから 70 年から 80 年たってみると、残念ながら、結構問題を抱えています。まず、環境問題です。スギは特に根が浅いです。そうすると浸食が早く、土砂が川に流れてしまうのでダムを造らないといけない。公共工事で日本の川がコンクリート張りになってしまう。今度、その土砂が海に流れないので海岸が浸食される。海でも工事しなくてはならないのでコンクリートだらけです。それがこのスギ、ヒノキ、特にスギの植林が原因の一つです。また、スギ林は明るいクスノキの森林に比べて暗く、台風に弱いため、折れたり落ちたりします。

もう一つは経済問題。戦後に、建材などできるだけ輸入材に依存しないようにという、そもそもの発想だったのですが、皮肉にも途中から輸入自由化になり、戦後の依存度が逆に増えてしまいました。経済成長の名の下でやった政策ですが、スギは低品質です。綺麗な床や壁、家具が欲しい時に、木の国日本には使える木がない。それで結局輸入材のエルムやメープル、オーク、ウォールナット等を使わざるを得ないのです。日本国内ですら需要が低いです。その材のことですがエルムはこんな綺麗です。オーク、美しい。こういうものがどんどん世界中に輸出されています。

四国の私の家の床は、日本の伝統のアカマツです。京都の寺院も昔の住宅も、ほぼ全部床はアカマツ。いろりの煙とアカマツの持つ独特のツヤが一緒になって、こんな美しい光景になりました。黒光りです。今でもアカマツの床が少しはまだ手に入ります。一方スギです。フローリングができなくはないけどこの程度。つまり、ログキャビンです。日本の森林問題でスギうんぬんの話しをすると、これは単なる景観的な話として思われがちですけど、深刻な経済的な問題もあると思います。

今度は健康問題。スギ花粉。どれだけ大変な問題か皆さんは百も承知だと思いますが、今までの植林した補助金の借金に重ねて、莫大な経済コストです。花粉症のアレルギーによって今度他のアレルギーが流行り、国民健康に大変な影響を与えています。

次に、文化問題です。スギとかヒノキのちょっと暗いオリーブ色の林ばかりで、春に僕が子どものときに覚えているような、明るい何とも言えず光っている新緑が目に入らなくなりました。葉っぱのデリケートな部分とか、きれいな枝の伸び、日本の墨絵や日本画のベースになっていたその景色が随分少なくなってしまって、文化的なダメージは大きい。

最後に、地方です。最初の植林は山でしたが、どんどん人が減っていくと集落の中に植林してしまい、集落が暗くなってしまいました。鬱蒼とした環境なので村の再生自体が非常に難しくなります。

しかし最近になって、民間レベルではスギを何とかしようと、地方で随分声が上がってきています。スギをとにかく伐採して使おう。跡地には広葉樹を植えよう等。このように、今の世界の技術を取り入れた新しいスタイルの林業が所々始まっていますので、新しい幕開けがこれから始まるのかなあという希望は、今は少し湧いています。

第 2 部です。今度は街路樹です。都市、町の中の木っていうのも大きな問題です。これは東京の多摩市にある木で、素晴らしいケヤキ並木。こんなに枝がきれいに伸びて、日影があってきれいですが、残念ながら日本の町はこうなんです。枝落とし（強剪定）しなくちゃいけない。私は外国のインバウンドのお客の手配をすることがあるんですけども、あるとき冬に訪れてきたおばさんがこの状態を見て、「日本の木を大変な病気でも襲ったのか」「なんでこうなったのか」と心配されました。あまりにも異様な雰囲気だったのです。

先ほどの鎮守の森は、そんなに手入れしたわけでもないしそのままですが、それが美しかった。それは生命力という一種の信仰もあったと思います。そのままというのが、日本の和歌、俳句、屏風絵だと思います。例えば海外では、私が行ったエール大学、スペインの有名なランブラスでは、枝がきれいに伸びて美しい木

が並んでいます。カナダのウィニペグとか、ワシントン D.C. のエルム。いろんな木がありますが、エルムの枝ほど美しいものはないのではないかと思います。日本のケヤキとエルムはほぼ同じ品種。世界ではこれが街路樹です。日本にもなくはないんです。大阪庁舎の並木とか、東京の青梅街道です。あの表参道は日本一のケヤキ並木かもしれない。

ちょっと工業モードの話に戻りましょう。「雑然として伸びる木の枝々はだらしない、切り上げたほうがすっきり」「落ち葉は汚い。ごみ。」という感覚は深く浸透してしまって、日本の非常に極端な剪定方法が、この 20、30 年でものすごく普及しました。例えば、ある庭師さんがネットに上げた写真です。お寺なんですが、こんな立派な木が屋根の上に伸びていました。それは第 1。第 2 は枝をどんどん刻んでいって、第 3 はだいぶ落として、だけどまだ足りない。できあがり。すごいのが、やっぱり持ち主は根本から伐採してくれと言うんです。つまり、木そのものが邪魔な存在になってしまいました。

落ち葉が汚いと言うのですがそうでしょうか。僕は子どものとき、アメリカで、秋に町中が美しい赤とか黄色の落ち葉、その落ち葉の匂いもいっぱいで、ものすごく楽しかったし美しかった。例えば、僕の掛け軸コレクションにある一つです。門が開いて落ち葉が多い。これは桃源郷の一句です。ここは天国だという世界でした。京都の古い寺院などは、あえてそのままにして美しくしていることによって、秋になるちょうど今の時期、人がたくさん見に来ます。

しかし、多くの市民は、「街路樹の落ち葉は誰が片付けるんだ、町が汚い」と言うんです。そういう陳情、苦情、それは市役所とか役場にじゃんじゃん入ります。鳥取市ではこんな立派なケヤキ並木があったのですが、落ち葉がいけないということで、枝を切り詰めたんです。もう悲しくなります。その時の市は、ケヤキの落ち葉が迷惑を掛けたとおわびを言っているのです。「ごめんなさい、この汚い木を植えたことが申し訳なかった」と言うのです。この工業モードの木の剪定、あるいは植林などの結果でどうなったのか。紅葉も落ち葉もなくなったので、秋はないと思わなければいけないです。そしたら日本は昔から四季が移り行く伝統文化なんだけれど、アップデートして三季にしましょう。もう秋がなくなったので、三季というのをこれから教科書で教えていきましょう。

しかし、本当にそんなことをしていいのか。皮肉で言っているのですけれども、このような街路樹の寂しい町の自然環境、子どもはこれしか知らない。きちきちと強度に枝を落とさなければいけない、一種の世界観と、鎮守の森の自然そのままを愛してきた考えとのギャップが非常に大きいと思うのですが、どちらも日本のものです。日本の原点でもあるし、こういうものをいかにして追求して再認識ができるかが、一つのポイントです。

また、街路樹とか木について文句や苦情が出ると行政が弱いのですが、やっぱりポリシーはないといけないです。「うちの町は自然を愛する町。落ち葉は美しい。だから残している」と。もちろん、落ちて完全に枯れてしまった後は後片付けをしないといけないけども、それにはいろいろな方法があります。アメリカの町などでは、大きなトラックで掃除機みたいなものを引いて片付けています。

あと、もう一つ大きな問題として、電線の地中化です。街路樹が切られる理由の一つは、電線と絡み合ってしまうことです。実は、電線の埋設をやってないのが世界の先進国の中で日本だけです。あるとき、うちに来たアメリカの高校生が、この景色を見て、「ああ、インドみたいだね」とぽろっと言いました。つまり、先進国ではないんだという見方です。地中化は、パリ、ロンドン、100 %、とっくに埋まっています。ニューヨークは 72%ですけれど、マンハッタンは 100%です。東京 23 区 3.1%、大阪 1.4%。もう全く次元が違います。最近は随分変わりました。オリンピックに向かって急ピッチで地中化が進んでいると思います。

この名古屋は面白い町ですが、きれいな町にするにはまず街路樹だと思います。街路樹をやる前にやっぱり電線の地中化。それさえできたら名古屋は魅力的な美しい町に変わっていく可能性はあると思います。まだ立派なケヤキ並木が残っています。

最後になりましたが、僕が最も好きなおとぎ話のような村があります。岡山の山奥にある新庄村。日露戦争の戦勝記念として「がいせん桜」と称した桜の木を大事にして、素晴らしい街並みをつくりました。桜を目当てに春先だけどっと人が来るのですが、僕はそれ以外のときが好きです。枝が道に伸びて、やっぱり落ち葉はありますが、朝、皆起きて、村の子どもたちも一緒にこうして掃くわけです。これは美しい自然との共生の仕方だと思います。

パネルディスカッション

メインテーマ：**自然と共に歩む明日をつくろう**

サブテーマ：**「海上の森」未来へつなぐ里山の絆**

- 「里山の環境・文化について」
- 「人材の育成、地域の活性化について」
- 「協働と企業のＣＳＲ活動について」

左記の各分野からパネリストを迎えてパネルディスカッションを開催しました。

ディスカッションの結果は、コーディネーターの川井秀一先生により「第１０回フォーラム宣言」として提案され、会場の皆様の拍手によって採択されました。

コーディネーター

川井 秀一

Shuichi Kawai

京都大学大学院総合生存学館学館長
日本学術会議会員
ＮＰＯ法人才の木理事

日本木材学会会長、日本材料学会副会長等を歴任するなど、林産科学・木質工学の分野で数々の業績を残している。木材利用の普及啓発活動にも積極的に取り組み、日本木材学会の「日本の森を育てる木づかい円卓会議」を前身とした「ＮＰＯ法人才の木」を立ち上げ、木づかい、森づくりの環境ネットワークづくりに取り組んでいる。

コメンテーター

稲垣 隆司

Takashi Inagaki

岐阜薬科大学　学長
元愛知県副知事

岐阜県土岐市下石町出身。1969年3月岐阜薬科大学卒、1970年3月国立公衆衛生院環境衛生専攻課程修了。1970年4月に愛知県に入庁し、その後、大気保全・水質保全・環境管理・廃棄物処理・自然環境保全の各業務に従事。2004年4月に愛知県環境部長、2006年4月に愛知県副知事に就任（2010年3月退任）。2010年6月に名古屋競馬株式会社代表取締役社長（2014年6月退職）、2012年8月に学校法人名古屋学院大学理事長（2015年3月退職）、2015年4月に岐阜薬科大学長に就任する。

オブザーバー

マリ クリスティーヌ

Mari Christine

異文化コミュニケーター
あいち海上の森センター　名誉センター長

父親の仕事に伴い４歳まで日本で暮らし、その後ドイツ、アメリカ、イラン、タイ等諸外国で生活。単身帰国後、上智大学国際学部比較文化学科卒業。大学在学中に芸能活動も開始。９４年東京工業大学大学院理工学研究科社会工学専攻修士課程修了。今現在も都市工学を学んでいる。幅広い視点から国際会議・式典等の司会、講演活動を多数こなす。

パネリスト

香坂 玲

Ryou Kousaka

第一分野: 里山の環境、文化について
東北大学大学院環境科学研究科　教授

専門は、地域資源管理、環境マネジメント論。東京大学農学部卒。ドイツ・フライブルク大学森林環境学部修了。博士（森林経済学）。国連環境計画（UNEP）生物多様性条約事務局（カナダ・モントリオール）勤務、名古屋市立大学を経て、現職。また、08年～10年、名古屋でおこなわれたCOP10（生物多様性条約第10回締約国会議）支援実行委員会アドバイザーを務める。著書に『農林漁業の産地ブランド戦略ー地理的表示を活用した地域再生』（共編著、ぎょうせい、2015年）の他、『地域再生』（岩波ブックレット、2011年）、共編著として、『伝統野菜の今』（清水弘文堂書房）など。

川尻 秀樹

Hideki Kawaziri

第二分野: 人材の育成、地域の活性化について
岐阜県立森林文化アカデミー　副学長

日本大学、東京農工大学を経て、岐阜県職員試験研究員兼林業短期大学校講師として奉職。その後、林業普及指導員研修担当や花フェスタ記念公園の管理、郡上市役所での林務行政など他分野を経験。郡上市では「健全で豊かな森林づくりプロジェクト」、「郡上地域森づくり協議会」、「郡上わりばし」プロジェクトなどに関与。「山を守る人づくり」「地域の山を活かす」を基本に、森林・林業に関連する様々な人づくりに関与。また技術士（森林部門）や樹木医、森林インストラクターなどの資格を行かして、森林・林業・森の生活文化を伝える多彩な活動を展開。著書に「読む植物図鑑」、「続・読む植物図鑑」、「森の案内人」、翻訳本「伐木造材術」、共著「将来木施業と径級管理」など。

伊藤 栄一

Eiichi Itou

第三分野: 協働と企業のＣＳＲ活動について
ＮＰＯ法人森のなりわい研究所　代表理事・所長

1960年愛知県蒲郡市三谷町生まれ、直後に名古屋へ移り20歳まで過ごす。この間バードウォッチングに目覚め、自然に関心を持つようになる。1979年岐阜大学農学部林学科に入学。1983年岐阜大学大学院に進み、1985年より岐阜大学助手。研究室（森林経営学）の性質から、森林について社会学、経済学、生態学などさまざまな視点で森林のある地域を捉えるトレーニングを受ける。2004年4月岐阜大学を退職しフリーの森林研究者として「森のなりわい研究所」を設立し、森林環境学習、森林セラピー、景観、多目的利用などの視点から調査研究並びに講演、フィールド活動などを通じて、「森の魅力」を伝える活動を行っている。ニックネームは「やまんじ」

オブザーバー

アレックス カー

Alex Kerr

■コーディネーター　川井 秀一

『自然と共に歩む明日をつくろう～「海上の森」未来へつなぐ里山の絆～』いうのが今日のテーマでございます。これまでの９回を簡単に振り返って、概括をしてみたいと思います。

先ほど、三つのビデオメッセージを、その時々のパネリスト、あるいは基調講演の方からメッセージをいただきました。第２回のケビン・ショートさんは、ナチュラリストとして、この海上の森、里山の自然の素晴らしさを改めて思い起こさせていただきましたし、それから第５回で阿部先生にご出演いただきましたが、その折はちょうど東日本大震災が３月に起こった後の、半年後のシンポジウムでございました。人が暮らすということ、われわれの生活の在り方ということ、こういったものを根本的に考え直させられた、そういった時期だったのではないかというふうに思います。阿部先生からは「市民の運動、これから継続していくように」という力強いメッセージをいただきました。また、第７回の広田さんは、NPO としてさまざまな市民活動をされていますが、「人と人とを結び付ける絆を大切にしてほしい」といったお話をいただきました。

全体の流れから見ていきますと、１回から４回は自然を中心に議論をし、それから続く５回から８回は、人間、社会をベースに話をしてきたと思います。９回では、テーマとして再び自然の叡智、つながり、広がり、これから自然と人と社会、こういうものを統合的に見ていく議論をし、本日もう一度里山の在り方、そしてわれわれの生活の在り方、自然との共存の在り方を皆さんと一緒に考えていきたいと思っております。

第１回のときに、恐らく県として、愛・地球博の後の理念をいかに継承し、これを皆さんと共有していくかというような議論があったのではないかというふうに想像いたします。その当時、副知事であられた稲垣先生、何か思い出話があれば、少し振り返りをしていただけると大変ありがたいと思います。

■コメンテーター　稲垣 隆司

私どもとしては、万博理念を継承すると同時に、今先生が振り返っていただいたように、みんなで考える、行動する、それと同時に、次の世代の人材を育成する、そういうことが大変重要と思い、このフォーラムを立ち上げました。

■コーディネーター　川井 秀一

いろんな皆さんと県の協力があって、フォーラムが立ち上がったのがちょうど 10 年前でございました。

マリさんは、海上の森の名誉センター長として、長くご活躍でした。思い出に残ることがあれば、一言お聞かせいただけたらありがたいと思います。

■オブザーバー　マリ クリスティーヌ

万博の時は、海上の森をみんなで守るんだという、熱意に引き込まれるようでした。素晴らしい皆さまのエネルギーが、世界を動かしたのではないかと思います。次のステップの方向が、今日のフォーラムの一つの題材になったらうれしいと思います。

■コーディネーター　川井 秀一

今日のパネリストの中に、以前のフォーラムに出てきていただいた方がおられます。香坂先生です。第３回と４回に、特に名古屋において COP10 が開催された折に、生物の多様性をどのように考えていくのか、行政ということを生き物の立場から見ていただきました。少しコメントをいただければと思います。

■パネリスト　香坂 玲

皆さまの大変なご協力があって、愛知目標という、この名前が付いた目標、そして名古屋議定書という、恐らく来年度ぐらいから日本が批准するかしないか、議論が本格化する議定書も生まれたということ、2012 年 COP10 を、ぜひ思い出していただきたいと思います。実は愛知目標というのは、今、世界で実践されているような生物多様性への取り組みです。生物多様性というとどうしても皆さん、生き物って頭にあるのですが、それがだんだん暮らしとか生活と関係してくるんだということを認識していくフェーズが３回目、４回目で、それが５回目以降につながっていったのではないかと思います。

■コーディネーター　川井 秀一

その生き物と人と自然、こういうものが一体となった里山、これを皆さんと一緒にもう一度考え直したい、これをいかに生かし、その中でわれわれが生かされるか、３人のパネリストから話題を提供いただきたいと思います。

■パネリスト　香坂 玲

愛知目標という、この 2050 年に向けた、自然と共生する社会というのが愛知目標なんですよと、今一度、思い起こしていただければと思います。

「森は海の恋人」という言葉、これはダムの反対運動からきま

した。今、人と自然がつながっていると、皆さんご存じだと思いますが、森と海もつながっているということです。今日、岐阜からお二人いらしてますけども、愛知県も岐阜県、三重県とつながって初めて生態系が出来上がっているっていうところを押さえておきたいと思います。

コウノトリとかオオタカの話、いろいろあったと思うんですけれども、スターじゃない生き物たちも、とても大事です。そのつながりと、一番下にある農業とか、植生とか、プランクトン、こういったものも含めて生物多様性っていうのは、つながりが大事だという概念だったことを思い出してください。

もう一つ、環境にいいことだから皆さんやりましょうというのだと、長続きしません。これをカーさんは環境にいいことを経済に組み込んでいます。海上の森も、恐らくそういう動きがどんどん出てくるのではないかなと思います。

生物多様性について知ってもらい、行動していただく。2016年、あと２カ月後は、メキシコでCOP13が開催されます。そこでは当然、市民社会との連携などが大事になってまいりますので、どうぞ皆さま、これからも生物多様性を愛知、名古屋で議論したんだということを念頭において、世界は今、「アイチ」とか言いながらちゃんと行動しているんです。専門家が何かやりなさいっていうことではなく、話し合いながらぜひ進めていっていただければと思います。

■パネリスト　川尻 秀樹

岐阜県を代表する伝統工芸の一つに、和傘というものがあります。主な材料はマダケ、エゴノキ、美濃和紙ですが、日本で生産される和傘の約９割が実は岐阜県で作られています。この和傘に関して、うちの学生が関連して人づくりをしたので、紹介させていただきます。

まず和傘といいますと、骨はマダケです。その和傘の骨を作る職人が、全国になんと、岐阜県にたった２人しかいないという現状です。また、傘を作るときに、傘の骨を入れるろくろという部分が、１本の傘に二ついるんですけど、このろくろというのがエゴノキで作られています。そのエゴノキのろくろ職人が、全国で岐阜県岐南町という所に１人しかいない状態です。和傘に使われるエゴノキはもともと岐阜の里山に多く自生している樹種です。加工しやすいとか、割れにくい等の利点があり、和傘以外にも、こけし等の細工物に使われています。この材料のエゴノキの厚木を納める人が２０１２年にいなくなってしまいました。

和傘業界としては、原材料の状況を全く知らない状況でしたし、地元の林業グループの人たちは、「里山を何とか利活用したいけども、どうしていいか分かんない。」という状態でしたので、学校で2012年の秋、エゴノキ・プロジェクトっていうのを立ち上げました。毎年500本のエゴノキを伐採しようと、全国の和傘職人も駆けつけて、私たちと一緒に活動をしています。

学生たちは、人によっては女性が和傘職人として独立したり、全国でたった一つだったろくろ作りの所に傘骨作りの職人として入ったり、太くなり過ぎたエゴノキで駒を作って自立することをされています。学校としては人づくりをしながら、里山とつながるという人材育成をしているような状況です。

■パネリスト　伊藤 栄一

単に「きょうどう」といってもいろんな字できょうどうと書きます。今日は「協働」ですけれども。先ほどのお話の中でも、入会権という言葉が出てきましたが、かつて里山的な空間というのは、入会権を持った協働的利用が、多分、主だったと思います。しかし、ライフスタイルの変化に伴って、それを支えてきた地域のコミュニティーと里山のつながりっていうのが薄れてきた。

担い手ということで考えると、かつては個人ですとか、地域社会が担っていたと思いますが、今はそれだけではきっと足りないので、有志や行政、企業の参加が期待されるわけです。

森に関わるインセンティブみたいな視点で見ると、個人が森に関わろうとすると、暮らしの糧っていうのがもともとは主だったのですが、今そこが非常に希薄ですから、趣味や義務となっています。特に、田舎に住んでいると、かなり多くが義務であったりします。最近では逆に、崩壊しつつあるコミュニティーを、こうした活動の中で再編をしていく動きがかなり出ているように思っています。

今、里山をベースにした里山社会といったようなものを創造していく必要があると思います。その実験場として、海上の森は素晴らしい所なんだろうと思います。10年以上かけていろいろな活動をしてきていらっしゃる。それが、この社会での新しい里山像なのかもしれません。

また、人工林は多過ぎると僕も思っていますが、とっても大事だと思います。かつての広葉樹林とのつながりを、もう一遍、新たにこの社会の中に作り上げていくことを、僕自身も目指していけたらいいと思っています。

■コーディネーター　川井 秀一

今、里山は、われわれ人間の関わり方が少なくなったが故にむ

しろ荒れているとよく聞きます。その実態を、香坂先生いかがでしょうか。

■パネリスト　香坂 玲

日本の生物多様性の危機、四つあると言われています。①開発による危機、②外来種による危機、③地球温暖化の危機、④人手が加わらない、アンダーユース。人が使わなくなると失われるもの、文化もあると思いますが、生き物も失われるので、日本の場合は、人口減少と相まって問題になっています。

江戸時代って、はげ山だらけだったっていうのは有名な話です。里山という言葉は、すごく大事で大切なものですけども、常にあったものではなくて、人が努力したり、作ってきたものです。これからも、われわれが作っていかなければいけないものだということは、大事ではないかと思います。

■コーディネーター　川井 秀一

われわれが見ているような、都市近郊の山、入会の地、雑木林と呼ばれるようなところを維持するのが、文化や伝統を、保全につながっていく、人間の社会に直接関わっているところではないかと思います。その辺りの里山の維持と、我々の人間社会の伝統、あるいは文化との関わりをお話しいただきたいと思います。

■パネリスト　川尻 秀樹

かんじきには伝承で、『前クロモジに後ボウシ』という呪文があります。前をクロモジ材で作って、後ろ側をヤマボウシ材で作ると、雪崩が来そうな所でも、壊れずに走って帰られるかんじきができるという口伝です。この頃は、不便だったからこそ、いかに木を生かすという知恵が地元の人たちにたくさんあって、民具として利用しなければならない実情から伝承されていました。ただ単に機能に向かって里山整備をするのではなく、産物を何か利用させていただくという形を描けると、伝えやすくなるのではないかと思っています。

■パネリスト　伊藤 栄一

草刈りは今、義務ですが、昔は多分、義務ではありませんでした。かつては必要だったから刈っていたのだから、今必要でないなら、刈らなければいいと思うんです。生活上、刈っていかないといけない所もありますが、なかなかそこの発想の転換がうまくできてなくて、もうちょっと突っ込んで、目指す方向性をみんなと議論できるといいと、いつも思っています。

■コーディネーター　川井 秀一

新たな産品を山から森から引き出そう、というのはどういう発想から出てきたのですか。学生さんでしょうか。

■パネリスト　川尻 秀樹

地元、里山の方たちです。自分たちが昔やっていたことを再現してくれるのだったら、「おう、やろうじゃないか」っていう機運が、地元の方にある。現地に入って、現地の人たちと一つのものを考えるというスタンスから、私たちは知恵をもらって、そういう活動につなげられたのだと思っています。

■コーディネーター　川井 秀一

現場をベースにしてもの考えていくことが大変重要かと思います。アレックス・カーさん、先ほどは、紅葉の美しさをもっと町の中で生かすべきだというふうなお話と、それから最後に、地域おこしの中で、町屋の再生ということをおっしゃっていたのですけれど、その町屋を再生してどのように使っていらっしゃるのでしょうか。実際にそれが経済のシステムの中でうまく回っているのかをお聞きしたいのですが。

■オブザーバー　アレックス・カー

先ほど、アンダーユースという話が出ました。どんどん村の人口が減って高齢化していく中で、維持できなくなってきています。もちろん草刈りを含めて。この頃、海外の大学などで、depopulation dividend と言われています。日本ではマイナス面ばかり聞くのですが、人がいなくなったことによって初めていいことができる。いなくなってどうしようもない、あるいは、ぎりぎり危機的な限界集落的な所で初めて動き出すこともある。新しい今の社会が必要とするものが生まれます。

田舎の世界的な問題ですが、これも僕なりの表現で田舎のリサイクルの時代が来たと思います。私たちが直している家は昔の農家ですが、今度はそれを一種のホテルにする。畑だったのがカヤ場に変わる。スギ植林がケヤキ公園に変わるんです。もともと使っていた用途が変わっていいと思います。

■コーディネーター　川井 秀一

町屋とか古民家は、どのように使われているのでしょうか。

■オブザーバー　アレックス・カー

一種のホテルですね。山奥では、少人数のスタッフで、旅館と

かホテルがやるようなサービスは無理ですから、基本的にお客が来て、鍵を渡して自由にしていただく。でもお客は非常に喜んでいます。

■コーディネーター　川井 秀一

われわれは古いものを生かして、残していこうという意識が強過ぎるのかも分かりません。カーさんのお話ですと、もう少し発想を変えて、新しい産業を創出する場として、里山を使うことができるのではないか。一つの全く違ったアイデアで、里山の生かし方を考えてみることも可能ではないかと思いました。

■コメンテーター　稲垣 隆司

里山、ただ志だけではやれません。産業を興すとか、ミティゲーション・バンキングなど。NPO の方々がやられたものをバンキングしておき、開発するところに売るなど、いろんなシステムを作っていかないといけないと思います。こういうのも、みんなで議論できるといいと思います。

■コーディネーター　川井 秀一

それぞれの地域で、里山の地域おこしを図っておられる。これは、ある意味で海上の森もそうでしょうし、全国それぞれの地域において、さまざまな試みが行われていると思います。そういった内容をわれわれが少しずつ広げて、里山の新しい在り方を模索し続けていくことが大事だと思います。行政だけではなく、県民の皆さんと、企業と、そして NPO の方々、さらには学校といったさまざまなステークホルダーが一緒になって、いろんな試みをしながら模索をしていくことが、里山に対して具体的な行動を起こすことにつながっていくこと、また、そういった行動で一つの成果が得られたとしたら、それをいろんな場で発信していくことが重要だと思います。